コミュニケーション促進に玩具は寄与するのか

～玩具の特性と存在役割についての実験的検証～

佐々木麻衣子[1]　大橋智樹[2]

（[1]社会福祉法人ロザリオの聖母会 仙台天使園、[2]宮城学院女子大学）

【目的】

「母親―子ども―玩具」という最初期の三項関係において相互交渉を促進するのは玩具である。これを起点として、本報告は玩具の特性とコミュニケーションの関係について検討することを目的とする。

【方法】

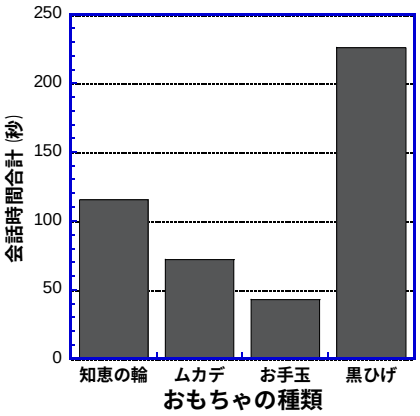
1．被験者：初対面の女子大学生（21～22 歳）25 組　計 50 名

2．手続き：実験の待ち時間と称して大学内の一室で 10 分間を二人きりで過ごさせる（机上には玩具（知恵の輪・ムカデ・お手玉・黒ひげのいずれか一つ）を置いておく）。玩具は、予備実験の結果に基づいて、特徴の異なるものを選定した。10 分が経過したあと実験者が戻り、ジグソーパズル３種類を協力して完成させる実験をおこなった。最後に、実験の印象や会話内容等についてのアンケートに回答させた。実験の様子はすべてビデオカメラで撮影した。

【結果と考察】

ここでは玩具の種類と会話時間との関連を中心に述べる。玩具の種類を独立変数とし会話時間の合計を従属変数とした分散分析の結果、玩具の種類の主効果が認められ、下位検定の結果、黒ひげとお手玉の間に有意傾向が示された（図）。この差は、玩具がもつ特性「ゲーム性」の有無に関連すると考えられる。会話内容の分析から、お手玉は遊びに没頭することは難しく、次々と話題が転換している。逆に「黒ひげ」は遊びそのものに関するの話題が多くを占めていた。しかし、自己開示の指標となる「プライベートな会話」についての評定では「黒ひげ」は相対的に少なく、他の話題への発展があまりないことがわかる。

つまりコミュニケーション促進をより個人的な領域への会話の発展と捉えると、ゲーム性が高く遊びそのものに没頭してしまう。黒ひげのような玩具は、発話量そのものは増えるものの、コミュニケーションの質は高めないようである。



しかし、対象者や環境が異なればふさわしい玩具は変化する。今回は初対面という状況においての玩具の役割を検討したが、この場合「なくても困らないが、きっかけ作りには便利」な“プラスα的存在”といえそうである。今後は、コミュニケーションの質と玩具の種類の関係についてさらに詳細に分析を進め、コミュニケーション促進に関する玩具の役割を明らかにしていきたい。